

海外の畜産物の需給動向

牛肉

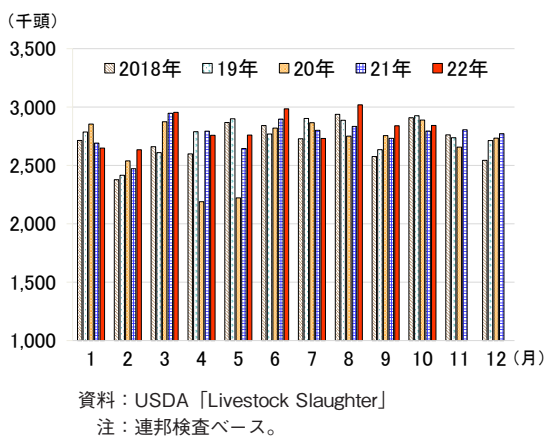
米国

肥育牛価格、今年最高値を記録

干ばつにより繁殖雌牛の淘汰が進む

米国農務省全国農業統計局 (USDA/NASS) によると、2022年10月の牛と畜頭数は284万2300頭（前年同月比1.7%増）とわずかに増加した（図1）。これを受けて、10月の牛肉生産量は109万390トン（同1.7%増）となった。また、10月の肉用経産牛のと畜頭数は35万頭（同12.3%増）となり、干ばつにより繁殖雌牛の淘汰が進むことで、牛群縮小による将来の生産減が懸念されている。USDAは、23年の牛肉生産量の予測を4万1000トン引き下げ、1191万8000トン（前年比7.3%減）とした。

図1 牛と畜頭数の推移



肥育牛価格、旺盛な需要により今年最高値に

米国農務省農業マーケティング局 (USDA/AMS) によると、2022年10月の肥育牛価格は旺盛な需要により100ポンド当たり149.00米ドル（1キログラム当たり459円：1米ドル=139.87円^(注)、前年同月比19.3%高）となり、今年の最高値を更新した（図2）。現地報道によると、食肉処理加工業者は平日のと畜量を増やして1頭当たりの処理コストを削減し、肥育牛価格の購入コスト高に対応している。一方、卸売価格（カットアウトバリュー）は100ポンド当たり251.58米ドル（同776円）と、インフレによる需要減の影響を受けて前月より下げつつも、堅調に推移した（図3）。

図2 肥育牛価格の推移

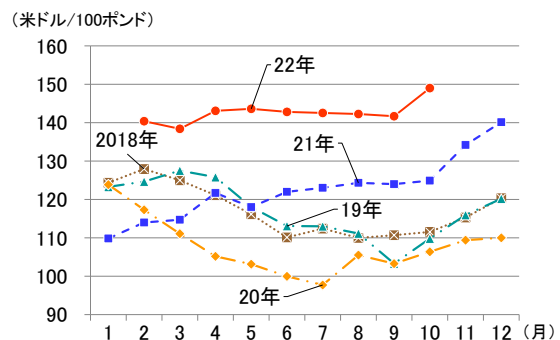
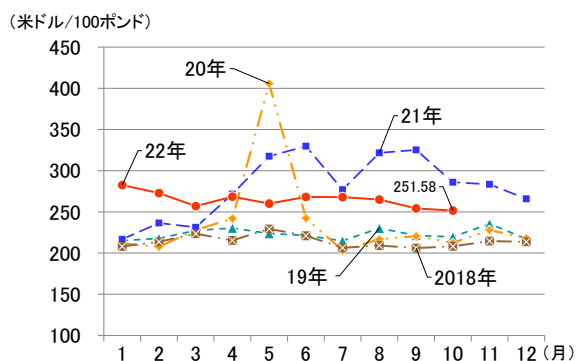


図3 牛肉卸売価格の推移



資料：USDA [Livestock & Meat Domestic Data]
 注1：カットアウトバリュー（各部分肉の卸売価格を1頭分の枝肉に再構成した卸売指標価格）。
 注2：チョイス級、600～900ポンド。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

牛肉輸出は減速傾向

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年9月の牛肉輸出量は12万5092トン（前年同月比5.7%減）と今年初

めて前年を下回ったものの、同年1～9月の累計輸出量は122万1081トン（前年同期比4.6%増）とやや増加している（表）。

輸出先別に見ると、9月はメキシコとフィリピンを除き、日本、韓国、中国など、ほぼすべての主要輸出先で減少した。特に中国向けは、これまで前年同月を上回る水準で推移してきた中で、同国のゼロコロナ政策などの影響を受け、前年同月比2.8%減となった。これを受けてUSDAは、22年の輸出見通しを前月から1万3000トン引き下げ、160万6000トンとした。

こうした状況について米国食肉輸出連合会（USMEF）のホルストロム会長は、「米ドル高や物流上の課題、中国の（都市）封鎖などは牛肉輸出にとって逆風だが、9月の輸出量は依然として過去最高水準であり、注目に値する」と述べ、米国牛肉需要の底堅さを強調した。

表 輸出先別牛肉輸出量の推移

(単位：トン)

	2021年 9月	22年 9月	前年同月比 (増減率)	シェア	22年 (1～9月)	
					前年同期比 (増減率)	
日本	31,731	29,340	▲7.5%	23.5%	282,259	▲0.9%
韓国	30,689	27,625	▲10.0%	22.1%	275,859	1.2%
中国	23,811	23,140	▲2.8%	18.5%	224,132	25.7%
メキシコ	10,381	10,923	5.2%	8.7%	91,109	▲14.1%
カナダ	10,087	9,006	▲10.7%	7.2%	92,651	▲0.3%
台湾	7,372	5,439	▲26.2%	4.3%	72,474	10.0%
香港	4,458	4,111	▲7.8%	3.3%	26,412	▲40.1%
フィリピン	1,111	2,683	141.6%	2.1%	20,131	49.1%
その他	13,029	12,824	▲1.6%	10.3%	136,053	24.3%
合計	132,669	125,092	▲5.7%	100.0%	1,221,081	4.6%

資料：USDA [Livestock and Meat International Trade Data]
 注：枝肉重量ベース。

(調査情報部 小林 大祐)

豪州

牛群再構築段階ながらも、と畜頭数が増加傾向の兆し

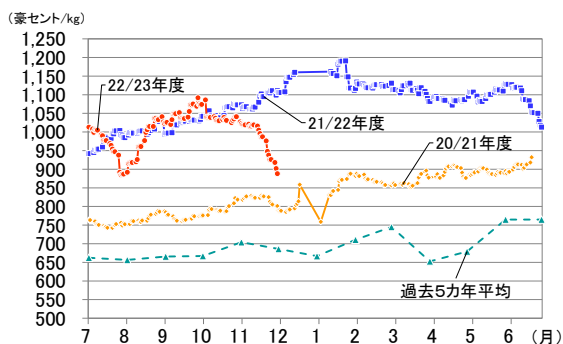
肉牛取引価格が急落

肉牛生体取引価格の指標となる東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、2022年11月半ばころから大きく下落し、同月30日時点では1キログラム当たり888豪セント（842円：1豪ドル=94.79円^{（注1）}）と約4カ月ぶりの安値を記録した（図1）。

豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）は、インフレによる生産資材価格の高騰や長雨によるフィードロットでの肥育不良などにより、牛の需要が伸び悩んでいるとし、現地報道では、この下落傾向は12月末ごろまで続く見込みとしている。

（注1）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

図1 EYCI価格の推移



資料：MLA

注1：年度は7月～翌6月。

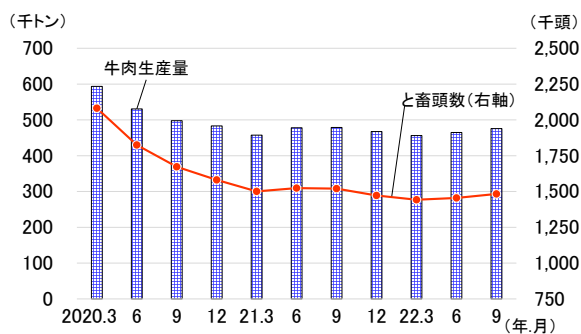
注2：東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、東部3州（クイーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州）の主要家畜市場における若齢牛の加重平均取引価格で、家畜取引の指標となる価格。肥育牛や経産牛価格とも相関関係にある。

と畜頭数と牛肉生産量は増加傾向で推移

豪州統計局（ABS）が2022年11月に公表した統計によると、同年7～9月期の牛と畜頭数は148万頭（前期比1.9%増）とわずかに増加し、2期連続で増加している（図2）。牛肉生産量についても、47万5600トン（同2.3%増）とわずかに増加している。

また、同年7～9月期の雌牛のと畜頭数割合は、43.3%と前期比で1.1ポイント上昇したが（図3）、雨が多く飼料確保が容易であることを背景に、依然として牧草飼育を主体に牛群再構築段階にあると言える。

図2 牛肉生産量およびと畜頭数の推移

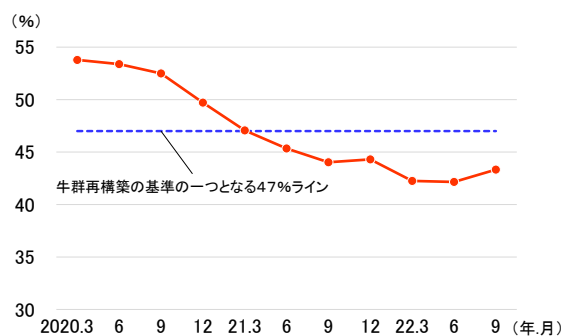


資料：ABS

注1：四半期ごとの数値。

注2：生産量は枝肉重量ベース。

図3 雌牛と畜割合（FSR）の推移



資料：ABS

注：四半期ごとの数値。

現地報道では、23年にはと畜頭数および牛肉生産量が顕著に回復してくる見込みとしているが、依然として食肉処理施設における労働力不足は継続している。このような中、豪州食肉産業協議会（AMIC）は、今後3～6カ月以内に牛が多数食肉処理施設に出荷されても、稼働率を上げられず処理しきれないだろうとしている。

他方で豪州フィードロット協会（ALFA）によると、22年7～9月期のフィードロット飼養頭数は、105万6056頭（前期比11.7%減）とかなり大きく減少し、フィードロットの稼働率も69.9%と前期より10ポイント以上、下落している（注2）。今後、穀物飼料価格の高騰など、経営環境が厳しいフィードロットにおける牛肉生産の動向が注目される。

（注2） 海外情報「2022年9月末のフィードロット飼養頭数、2期連続で減少（豪州）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003403.html）を参照されたい。

牛肉輸出量の低迷は継続

豪州農林水産省（DAFF）によると、2022年10月の牛肉輸出量は7万2979トン（前年同月比1.8%減）とわずかに減少した（表）。

輸出先別に見ると、日本向けは1万5751トン（同16.1%減）と大幅に減少したほか、韓国向けも1万3297トン（同10.9%減）とかなりの程度減少している。現地報道によると、米国の干ばつによる牛群淘汰により、日本や韓国向けには比較的安価な米国産の穀物肥育牛肉が輸出されているとしている。

このような中で、22年11月23日に豪英FTA協定に関する豪州議会の批准手続きが完了している。現地報道では、11月15～16日に開催されたG20バリ・サミットでの非公式な場で、豪州のアルバニー首相が英国のスナク首相に対し、英国側の批准手続きを経た後、23年第1四半期には同協定が発効されることを望む旨の言及をしたとしている。

表 輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年 10月	22年 10月	前年同月比 (増減率)	22年 (1～10月)	
				前年同月比 (増減率)	前年同月比 (増減率)
日本	18,769	15,751	▲ 16.1%	180,610	▲ 8.2%
中国	12,619	14,318	13.5%	131,649	8.4%
米国	13,633	13,752	0.9%	107,907	▲ 11.2%
韓国	14,920	13,297	▲ 10.9%	131,297	▲ 0.3%
東南アジア	6,674	7,898	18.3%	75,880	▲ 7.2%
中東	2,273	2,447	7.7%	23,841	▲ 4.7%
EU	530	468	▲ 11.7%	6,351	▲ 3.0%
その他	4,916	5,049	2.7%	51,243	2.0%
輸出量合計	74,333	72,979	▲ 1.8%	708,778	▲ 3.6%

資料：DAFF

注1：船積重量ベース。

注2：東南アジアは、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの合計。

注3：中東は、イラン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イエメン、エジプト、パレスチナ自治区、アラブ首長国連邦を構成する七つの首長国のうち四つの首長国（アブダビ、ドバイ、フジャイラ、ラース・アル＝ハイマ）の合計。

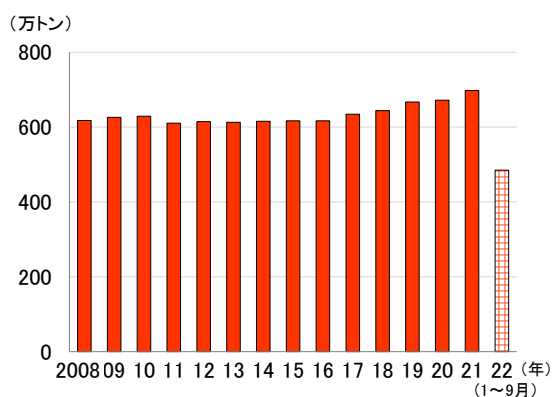
（調査情報部 国際調査グループ）

コロナ禍にあっても牛肉輸入量は増加

牛肉生産量は増加

中国国家统计局によると、2022年1～9月期の牛肉生産量は、前年同期比3.6%増の485万トンとなった（図1）。

図1 牛肉生産量の推移



資料：中国国家统计局

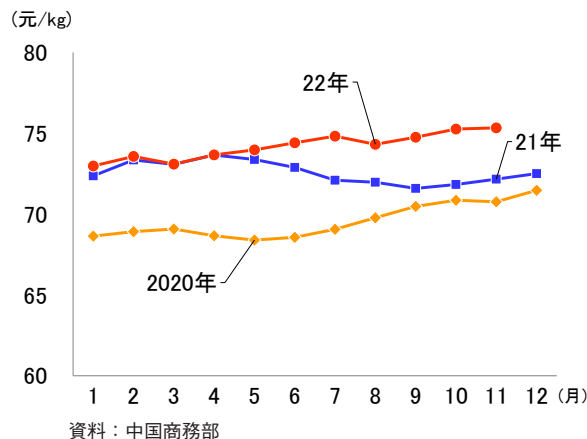
牛肉価格は引き続き高値で推移も政府は警戒か

牛肉卸売価格は、2019年以降、需要増加や飼料価格高騰などから高値で推移している。21年4～9月にかけてわずかに下落傾向となったものの、その後は小幅ながらも上昇に転じ、22年11月には1キログラム当たり75.3元（1486円：1元=19.73円^(注)）となった（図2）。今後の価格動向について現地関係者の間では、需要期である冬場を迎えることから、小幅な上昇が継続するとの見方が大勢を占めている。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

また、中国政府は22年9～10月にかけて、数量は少ないものの国家備蓄制度による牛・羊肉の買い入れおよび保管を4回実施した（合計0.98トン）。一方、現地専門家からは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で需要全体が振るわない中で牛肉の輸入量が増加を続けていることから、市場の需給バランスが崩れつつあるとの意見もある。このような状況を踏まえ、今回の政府買い入れについて、価格支持という実効性を狙ったものではなく、国内の牛肉価格を堅持するという政府のけん制意思を市場に示す意図があったものとの見方がある。

図2 牛肉卸売価格の推移



資料：中国商務部

牛肉輸入量は引き続き増加

中国では牛肉生産の拡大が進む一方で、高まる需要に追い付かず牛肉輸入量は増加傾向で推移している。

2022年1～10月の牛肉輸入実績を見ると、冷凍・冷蔵ともにかかなり大きく増加した（表1、2）。COVID-19の影響で需要全体が停滞傾向であるとされる中で牛肉輸入量が好

調である要因について現地専門家からは、牛肉が主に消費される外食産業は不振ではあるものの、輸入牛肉は国産牛肉に比べて、(1)安価であることから消費者が比較的手に取りやすい(2)小売業者、外食業者とも、収益性が高い輸入牛肉の取り扱いを好む傾向にある一との意見が聞かれた。

また、米国農務省は10月12日、23年の中国の牛肉輸入動向(冷凍および冷蔵)について、本年よりもかなりの程度減少するとの

予測を公表した(22年:314万トン、23年:285万トン、22年比9.2%減)。その要因として中国での牛肉生産量の増加(750万トン、同5.3%増)が挙げられているが、これに加え、消費の伸びの鈍化(22年:前年比2.6%増、23年:同0.8%増)も要因として見込まれると考えられる。また同資料では、中国などの輸入減退により、23年の世界全体の牛肉輸出量(1214万トン、同1.2%減)も減少すると予測されている。

表1 冷凍牛肉の輸入先別輸入量の推移

(単位:千トン)

	2018年	19年	20年	21年	22年 (1~10月)	前年同期比 (増減率)
ブラジル	322.7	399.6	848.4	858.5	866.2	14.3%
アルゼンチン	180.4	375.5	481.1	461.7	398.5	2.3%
ウルグアイ	218.6	285.7	228.3	352.9	307.8	14.7%
ニュージーランド	107.6	205.2	160.9	191.7	182.2	10.1%
豪州	160.5	279.7	220.0	138.6	129.8	21.5%
米国	6.7	9.0	24.6	130.7	131.3	22.9%
その他	27.0	67.3	106.2	145.2	137.0	22.0%
合計	1,023.4	1,622.0	2,069.6	2,279.3	2,152.9	12.9%

資料:「Global Trade Atlas」

注1:製品重量ベース。

注2:HSコード0202。

表2 冷蔵牛肉の輸入先別輸入量の推移

(単位:千トン)

	2018年	19年	20年	21年	22年 (1~10月)	前年同期比 (増減率)
豪州	12.6	27.5	33.4	24.2	19.8	12.9%
米国	0.2	0.9	3.5	13.2	13.4	50.3%
ニュージーランド	3.2	9.2	8.9	10.1	8.6	10.4%
アルゼンチン	—	0.1	1.5	3.5	2.0	▲21.0%
ロシア	—	—	0.0	0.2	0.2	22.6%
ウルグアイ	—	0.1	1.3	2.3	0.1	▲95.1%
その他	0.01	0.1	0.1	0.01	0.002	▲73.4%
合計	16.0	37.9	48.7	53.6	44.0	12.5%

資料:「Global Trade Atlas」

注1:製品重量ベース。

注2:HSコード0201。

(調査情報部 阿南 小有里)

豚肉

EU

豚肉供給量の減少は続き、豚肉価格は高値を維持

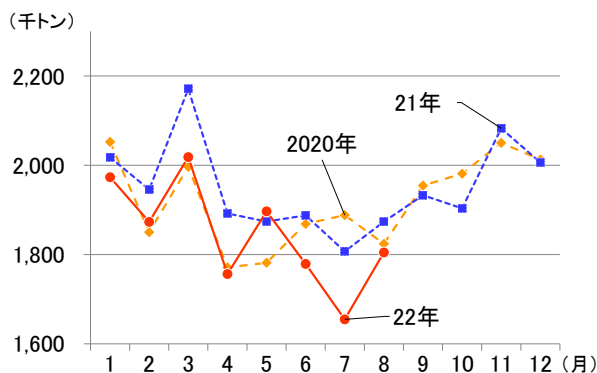
豚肉生産量は引き続き前年同月比減

欧州委員会によると、2022年8月の豚肉生産量（EU27カ国）は、180万4770トン（前年同月比3.7%減）とやや減少した（図1）。同月のと畜頭数は前月から1割近く増えたものの、1992万頭（同2.7%減）と前年同月

を下回り、また、1頭当たり枝肉重量も90.2キログラム（同1.0%減）と減少したことで、前年同月の生産量には及ばなかった。

同月の生産量を主要生産国別に見ると、デンマーク（同1.6%増）、オランダ（同4.5%増）が前年同月を上回ったものの、スペイン（同5.3%減）、ドイツ（7.1%減）、フランス（2.0%減）の上位3カ国を始め多くの国が前年同月を下回ったことで、全体としては減産となった（表1）。欧州委員会によると、主要国のドイツでは、アフリカ豚熱が依然として豚肉生産に大きな影響を及ぼしているとしている。また、飼料価格をはじめとする継続的な生産資材の高騰と散発しているアフリカ豚熱の影響により、EUの豚肉生産量は今後も減少傾向で推移すると見込んでいる。

図1 豚肉生産量の推移



資料：欧州委員会「Eurostat」
注1：直近月は速報値。
注2：枝肉重量ベース。

表1 主要生産国別豚肉生産量の推移

(単位：千トン)

	2021年 8月	22年 8月	前年同月比 (増減率)	22年 (1～8月)	
				前年同期比 (増減率)	
スペイン	397	376	▲ 5.3%	3,364	▲ 0.4%
ドイツ	400	371	▲ 7.1%	2,994	▲ 9.7%
フランス	184	180	▲ 2.0%	1,438	▲ 1.8%
デンマーク	152	155	1.6%	1,119	▲ 3.3%
オランダ	138	144	4.5%	1,130	▲ 0.7%
ポーランド	148	144	▲ 2.8%	1,186	▲ 8.5%
イタリア	105	103	▲ 1.7%	846	▲ 4.4%
その他	351	333	▲ 5.3%	2,680	▲ 5.4%
合計	1,874	1,805	▲ 3.7%	14,756	▲ 4.6%

資料：欧州委員会「Eurostat」
注：枝肉重量ベース。

卸売価格は引き続き高値で推移

欧州委員会によると、2022年10月の豚枝肉卸売価格（EU27カ国）は、前年同月比55.3%高の100キログラム当たり202.74ユーロ（2万9414円：1ユーロ=145.08円^{（注）}）となり、前月より下がったものの、引き続き前年同月を大幅に上回った（図2）。牛肉の代替としてより安価な豚肉が選択されている傾向があり、供給量が減る中で、底堅い需要から今後も堅調に推移するとしている。現地報道によると、10月の下落は、9月に記録

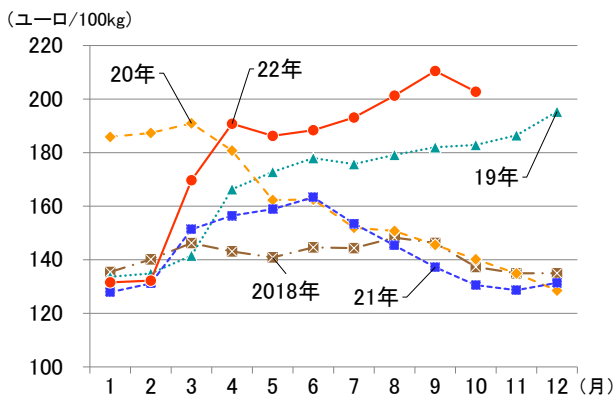
した高値への反発によるものとしている。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

22年8月の輸出量、中国向けの減少から前年同月比減

欧州委員会によると、2022年8月のEU域外への豚肉（冷蔵・冷凍）輸出量（EU27カ国）は、24万6869トン（前年同月比3.1%減）と前年同月をやや下回った（表2）。主要輸出先別に見ると、全体の34%を占める中国向けの減少（同12.5%減）が大きく、全体の減少要因となっている。一方で、ユーロに対する為替相場が比較的安定した日本向けや、アフリカ豚熱発生により減少する国内生産を補うために輸入税率を引き下げたフィリピン向けなどは増加傾向にある。欧州委員会は、EU域内の豚肉価格の高騰は、輸出競争力を相対的に低下させており、22、23年ともに豚肉輸出量は減少する可能性があるとしている。

図2 豚枝肉卸売価格の推移



資料：欧州委員会「Meat Market Observatory-Pigmeat」
注：EU参考価格（CLASS E）。

表2 輸出先別豚肉輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年 8月	22年 8月	前年同月比 (増減率)	22年 (1～8月)	
				前年同月比 (増減率)	前年同月比 (増減率)
中国	96	84	▲ 12.5%	517	▲ 63.1%
日本	26	29	13.1%	262	42.8%
英国	29	26	▲ 11.6%	201	▲ 5.4%
フィリピン	12	20	73.4%	162	49.7%
韓国	16	18	9.5%	185	45.9%
豪州	10	10	▲ 2.0%	87	49.8%
その他	66	61	▲ 8.5%	511	4.6%
合計	255	247	▲ 3.1%	1,924	▲ 25.3%

資料：「Global Trade Atlas」
注1：製品重量ベース。
注2：HSコードは0203。

（調査情報部 上村 照子）

ブラジル

22年の豚肉輸出量は4年ぶりに減少傾向で推移

22年の豚肉生産量、堅調な国内需要を背景に増加傾向で推移

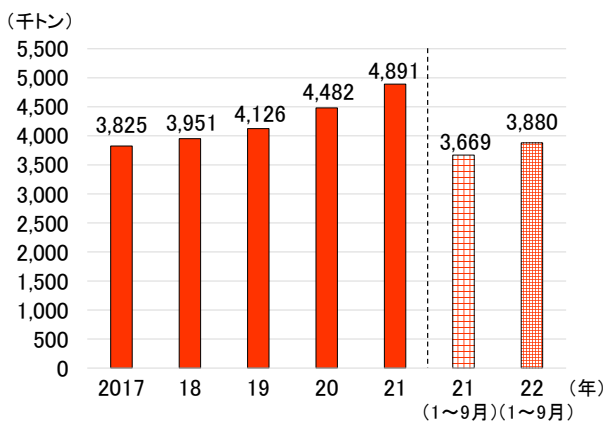
ブラジル地理統計院（IBGE）によると、2022年1～9月の豚肉生産量は388万トン（前年同期比5.7%増）と前年同期をやや上回った（図1）。これは、豚肉生産量の7割強を占める国内消費において、COVID-19の流行に伴う行動制限が行われた中で、低所得者層の消費者を中心に牛肉に比べて一層割安感が強まった豚肉が選ばれたことが背景にあるとされる。一方、同3割弱を占める輸出については、後述の通り21年後半から中国向けが減少したものの、その他の輸出先向けがその落ち込みの一部をカバーしたため、全体としては前年からやや減少傾向で推移している。

22年の生体豚価格は上昇傾向で推移

サンパウロ大学農学部応用経済研究所（CEPEA）によると、生体豚価格（パラナ州）は、豚肉生産量の増加や国内外の経済状況の悪化により2021年10月～22年1月にかけて3割程度下落した（図2）。一方、インフレの進行に伴い飼料費、家畜輸送費などの生産コストが上昇した結果、独立系を中心とした中小規模の養豚農家では、その多くが経営難に陥った。このような状況に対応するため、最大の豚肉生産州であるサンタカタリーナ州では22年5月、州政府が養豚農家に対し融資に対する利子補給を行う支援を開始した。その後、価格は上昇基調で推移しており、22年10月時点で1キログラム当たり6.69リアル（177円：1リアル=26.42円^(注)）と前年同月並みにまで回復した。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「現地参考為替相場」の2022年11月末Selling相場。

図1 豚肉生産量の推移

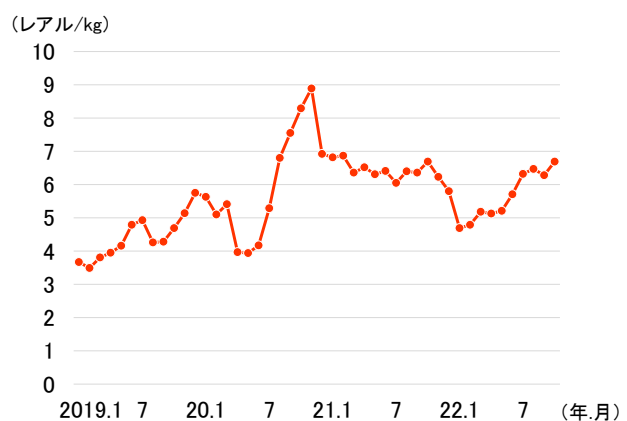


資料：IBGE

注1：枝肉重量ベース。

注2：2021～22年は暫定値。

図2 生体豚価格の推移



資料：CEPEA

注：パラナ州における生体取引価格。

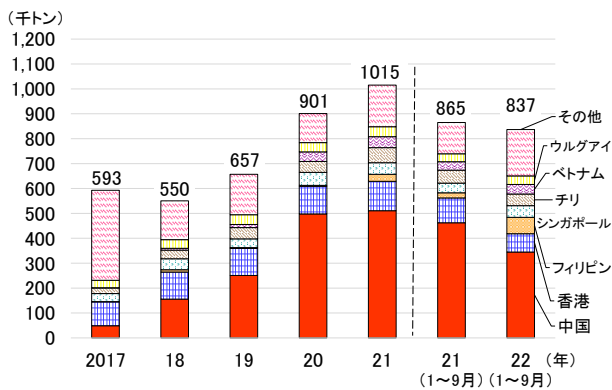
22年1～10月の豚肉輸出量、中国向けは前年同期比25.4%減

ブラジル経済省貿易局（SECEX）によると、2022年1～10月の豚肉輸出量は、83万6584トン（前年同期比3.3%減）と前年同期をやや下回った（図3）。同国の豚肉輸出量は、18年以降、中国向けを中心に大幅に増加してきたが、4年ぶりに減少傾向で推移している。

輸出先別に見ると、最大の中国向けは、18年に同国で発生したアフリカ豚熱に伴う

豚肉の減産分を補うため輸入需要が高まり、同国向け輸出は大幅な増加傾向で推移したが、21年後半になると同国で豚肉生産が回復して輸出量は減少に転じ、21年の輸出量は前年比2.6%増にとどまった。22年1～10月は、豚肉需給の緩和が続き34万4959トン（同25.4%減）と大幅な減少となった。ただし、8月以降の同国向け月間輸出量は4万トン台と回復基調で推移している。中国、香港向けが減少する一方で、フィリピン向けは、国内のインフレ抑制対策として輸入関税の引き下げ措置が講じられたこともあって6万5952トン（同3.18倍）と大幅に増加した。このほか、シンガポール向けも4万7094トン（同22.3%増）となるなど中国以外のアジアや南米近隣国などへの輸出量が増加し、中国向けの落ち込みを一部補完した。この結果、同期間の輸出量に占める中国向けの割合は21年同期の53.5%から12.3ポイント低下し41.2%となった。

図3 豚肉輸出量の推移



資料：SECEX
注：製品重量ベース。

(調査情報部 井田 俊二)

鶏肉

米 国

鶏肉供給増で卸売価格は下落

22年1～10月の鶏肉生産量はわずかに増加

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年10月の鶏肉生産量は処理羽数、生体重量の増加により184万4000ト

ン（前年同月比6.2%増）とかなりの程度増加し、同年1～10月の累計は1742万3000トン（前年同期比2.3%増）とわずかに増加した（表1）。これを受けてUSDAは、22年の鶏肉生産量を前年比2.4%増と予測している。

表1 鶏肉生産量の推移

	2021年 (1～12月)		22年 10月		22年 (1～10月)	
	生産量 (千トン)	前年比 (増減率)	1,844	前年同月比 (増減率)	17,423	前年同期比 (増減率)
生産量 (千トン)	20,366	0.7%	1,844	6.2%	17,423	2.3%
処理羽数 (百万羽)	9,211	▲0.2%	809	4.8%	7,860	2.1%
生体重量 (キログラム/羽)	2.93	0.8%	3.01	1.2%	2.93	0.1%

資料：USDA [Livestock & Meat Domestic Data]

注1：連邦食肉検査済みのもの。

注2：生産量は可食処理ベース（骨付き）。

卸売価格は供給増により下降基調

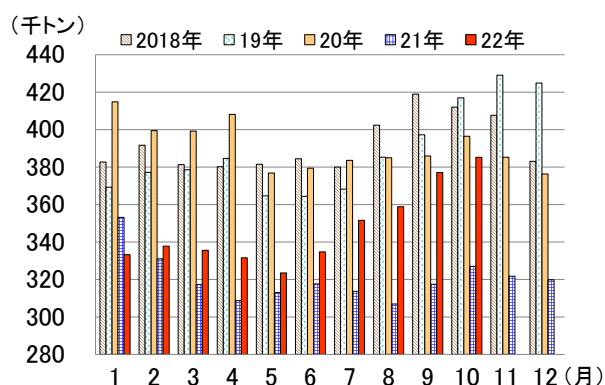
USDA/ERSによると、2022年10月の鶏肉卸売価格は1ポンド当たり1.22米ドル（1キログラム当たり376.20円：1米ドル＝139.87円^注、前年同月比18.4%高）と前年同月を大幅に上回った（図1）。ただし、卸売価格は5月をピークに下降しており、10月の価格は5月と比べて28.1%低下した。

一方、22年10月末の鶏肉冷凍在庫量は38万5245トン（前年同月比17.8%増）と、18～20年の水準を下回りながらも、前年を大幅に上回った（図2）。これら在庫状況や生産量の増加による供給増を踏まえてUSDAは、22年第4四半期の価格予測を前月発表から2セント引き下げ、1ポンド当

り1.25米ドル（1キログラム当たり385.45円）とした。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

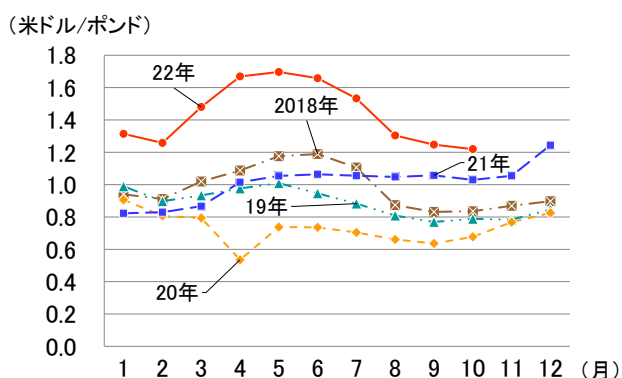
図2 鶏肉冷凍在庫量の推移



資料：USDA [Cold Storage]

注：各月末在庫。

図1 鶏肉卸売価格の推移



資料：USDA [Livestock & Meat Domestic Data]

22年1～9月の鶏肉輸出量、前年同期比でわずかに減

USDA/ERSによると、2022年9月の鶏肉輸出量は、27万1250トン（前年同月比0.6%増）と前年同月をわずかに上回った（表2）。輸出先別に見ると、輸出量首位のメキシコ向けがかなりの程度減少したものの、キューバやアンゴラ、フィリピン、台湾、ベトナム向けなどが大幅に増加し、メキシコ向けの減少分を相殺する形となった。また、同年1～9月の輸出量は、7、8月の輸出が低調だったことにより、243万2205トン（前年

同期比1.8%減)と前年同期をわずかに下回った。

USDAは、主要輸出先への出荷が好調であることや、生産量増加が見込まれることなど

から、22年の鶏肉輸出量を327万1000トン(前年比2.0%減)とし、前月の予測から引き上げた。一方で、23年の輸出量は334万3000トンと、前月の予測から据え置かれた。

表2 輸出先別鶏肉輸出量の推移

(単位:トン)

	2021年 9月	22年 9月	前年同月比 (増減率)	シェア	22年 (1~9月)	
					前年同期比 (増減率)	
メキシコ	62,634	56,142	▲10.4%	20.7%	478,984	▲12.0%
キューバ	17,836	25,030	40.3%	9.2%	203,238	▲10.4%
アンゴラ	13,199	20,886	58.2%	7.7%	103,702	12.6%
フィリピン	8,642	20,294	134.8%	7.5%	144,415	13.1%
台湾	11,344	15,086	33.0%	5.6%	191,803	64.6%
ベトナム	7,039	13,978	98.6%	5.2%	85,964	4.8%
カナダ	11,783	13,897	17.9%	5.1%	116,554	4.6%
その他	137,099	105,938	▲22.7%	39.1%	1,107,544	▲5.7%
合計	269,577	271,250	0.6%	100.0%	2,432,205	▲1.8%

資料: USDA 「Livestock and Meat International Trade Data」

注1: 製品重量ベース。

注2: もみじ(鶏足)を除く。

(調査情報部 小林 大祐)

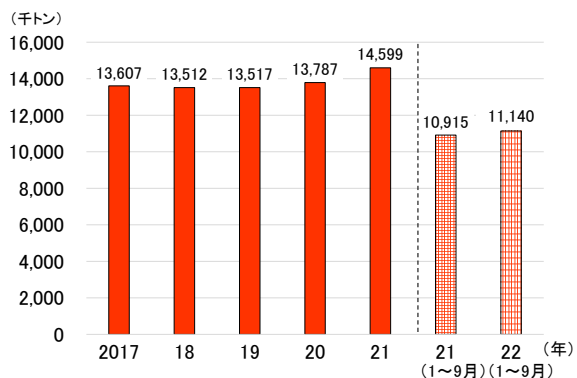
ブラジル

22年の鶏肉輸出は単価大幅高の中、堅調に推移

22年1~9月の鶏肉生産量、前年同期比2.1%増

ブラジル地理統計院(IBGE)によると、2022年1~9月の鶏肉生産量は1114万トン(前年同期比2.1%増)と前年同期をわずかに上回った(図1)。生産量の約7割を占める国内消費はインフレによる消費者購買力の低下などにより減少しているものの、海外からの堅調な鶏肉需要が同国の鶏肉生産をけん引しているとみられる。

図1 鶏肉生産量の推移



資料: IBGE

注: 2021~22年は暫定値。

22年1～10月の鶏肉輸出量、中国向けは前年同月を大幅に下回る

ブラジル経済省貿易局（SECEX）によると、2022年1～10月の鶏肉輸出量は367万8258トン（前年同期比4.4%増）と前年同期をやや上回った（表）。米ドルに対するレアル安の為替相場に加え、アジア、EUおよび北米などで発生した高病原性鳥インフルエンザ、さらに、ウクライナ情勢の影響などにより多くの地域で動物性タンパク質の不足が生じたためとみられる。このような海外での鶏肉需給や、飼料、ヒナなど生産コストの上昇を反映して、輸出単価（米ドルベース）は前年同期比23.5%高と大幅に上昇した。

輸出先別に見ると、最大の中国向けは45万3006トン（同17.4%減）と前年同期を大幅に下回った。これは、22年前半に鶏肉の取引価格が高く、また中国における保管冷蔵庫の一時的な閉鎖という状況下で、輸入業者の資金繰りに問題が生じ、同国向け輸出量が減少したためとみられる。アラブ首長国連邦

向けは37万5493トン（同22.5%増）と大幅に増加し、日本を抜いて中国に次ぐ輸出先となった。同国では、輸入飼料などの生産コストの上昇や政府による鶏肉の価格統制により飼養羽数が減少する一方、経済成長や人口の増加を背景とした国内需要や鶏肉の再輸出先である近隣国の鶏肉需要が強いことなどが要因とされている。また、日本向けは34万5413トン（同3.1%減）と前年同期をやや下回った。さらに、サウジアラビア向けは29万182トン（同7.7%減）と前年同期をかなりの程度下回った。同国は21年5月、ブラジル産輸入鶏肉にサルモネラ汚染が確認されたとして11カ所の鶏肉処理場からの輸入を停止した。このほか、サウジアラビアは22年3月、18年ぶりにタイからの鶏肉輸入を再開しており、これらがブラジルからサウジアラビアへの鶏肉輸出に影響を及ぼしたとみられる。

表 輸出先別鶏肉輸出量および輸出額の推移

区分	2021年（1～10月）			22年（1～10月）			前年同期比（増減率）		
	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	輸出量 （トン）	輸出額 （千米ドル）	単価 （米ドル/トン）	輸出量	輸出額	単価
中国	548,743	1,081,405	1,971	453,006	1,105,214	2,440	▲17.4%	2.2%	23.8%
アラブ首長国連邦	306,566	535,842	1,748	375,493	801,910	2,136	22.5%	49.7%	22.2%
日本	356,605	668,880	1,876	345,413	790,736	2,289	▲3.1%	18.2%	22.0%
サウジアラビア	314,401	571,017	1,816	290,182	719,457	2,479	▲7.7%	26.0%	36.5%
南アフリカ共和国	245,352	171,250	698	227,501	149,756	658	▲7.3%	▲12.6%	▲5.7%
フィリピン	147,526	133,743	907	213,917	251,591	1,176	45.0%	88.1%	29.7%
韓国	93,862	166,323	1,772	153,244	335,917	2,192	63.3%	102.0%	23.7%
シンガポール	84,053	162,358	1,932	128,937	297,727	2,309	53.4%	83.4%	19.5%
その他	1,426,949	2,175,347	1,524	1,490,567	2,851,139	1,913	4.5%	31.1%	25.5%
合計	3,524,056	5,666,166	1,608	3,678,258	7,303,447	1,986	4.4%	28.9%	23.5%

資料：SECEX

注1：HSコード0207.11、0207.12、0207.13、0207.14の合計。

注2：製品重量ベース。

鶏肉卸売価格は高水準の状況が継続

サンパウロ大学農学部応用経済研究所 (CEPEA) によると、ブラジルの鶏肉卸売価格 (サンパウロ州、名目価格) は、堅調な需要を背景に2020年5月ごろから上昇傾向で推移し、21年9月中旬には統計が公表された04年以降で最高値となる1キログラム当たり8.57リアル (226円: 1リアル=26.42円^(注)) を記録した (図2)。その後は価格高騰により需要が減退し、21年10月以降、価格は下落傾向に転じた。しかし、22年2月以降は、ウクライナ情勢や米国での高病原性鳥インフルエンザの発生などによる供給量の減少に加え、不安定な飼料供給に起因する生産コストの上昇などを反映して価格は再び上昇した。直近の価格は同7.96レ

アル (210円、11月29日現在) で、22年7月以降、同8リアル (211円) 前後の高水準の状況が続いている。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末のSelling相場。

図2 サンパウロ州の鶏肉卸売価格 (丸鶏・冷蔵) の推移



(調査情報部 井田 俊二)

牛乳・乳製品

米 国

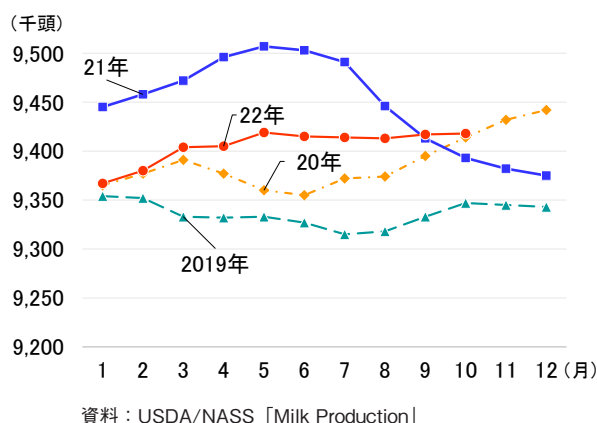
国内外の旺盛な需要を背景に、バター卸売価格は高水準

22年10月の生乳生産量、前年同月比1.2%増

米国農務省全国農業統計局 (USDA/NASS) によると、2022年10月の乳用経産牛飼養頭数は941万8000頭 (前年同月比0.3%増) と2カ月連続で前年同月を上回り、5月以降ほぼ横ばいで推移している (図1)。

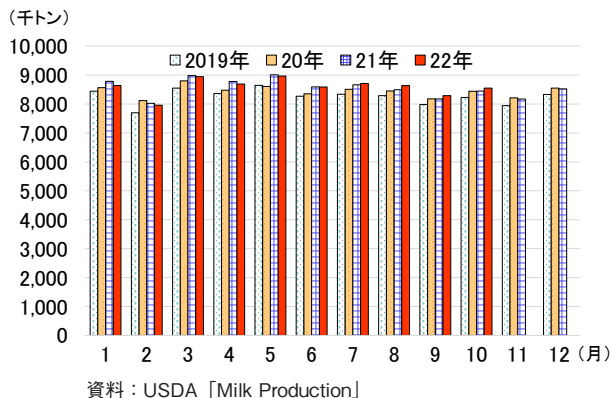
22年10月の生乳生産量は、飼養頭数の微増に加え、1頭当たり乳量が増加していることから、855万トン (前年同月比1.2%増)

図1 乳用経産牛飼養頭数の推移



とわずかに増加し、7月以降は前年同月を上回って推移している（図2）。

図2 生乳生産量の推移

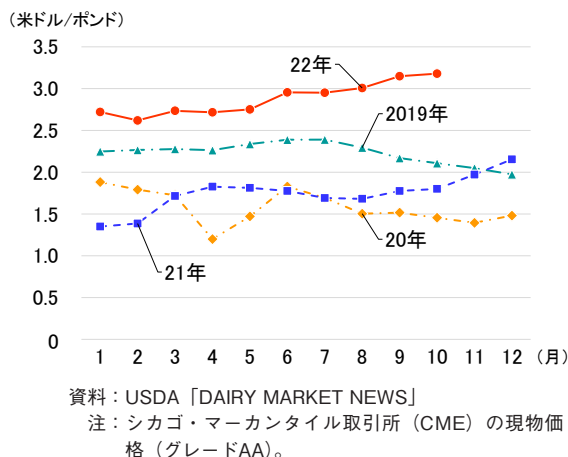


バターの在庫量は減少し、卸売価格が上昇

USDA/NASSによると、2022年10月のバターの期末在庫は10万8700トン（前年同月比14.1%減）とかなり大きく減少した。年末のホリデーシーズンに向けて国内外の需要が高まる中、今年6月まで国内の生乳生産量が伸び悩んだことや、輸出が好調なことなどが減少の要因とされている。このため、同月のバターの卸売価格は1ポンド当たり3.18米ドル（1キログラム当たり981円：1米ドル=139.87円^{（注）}、同76.6%高）と大幅に上昇し、3カ月連続で3.0米ドルを上回る高水準で推移している（図3）。

（注）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

図3 バターの卸売価格の推移



脱脂粉乳の輸出量は減少するも、乳製品全体の輸出量は増加

米国農務省経済調査局（USDA/ERS）によると、2022年9月の乳製品輸出量は、脱脂粉乳が前年同月を下回ったものの、乳糖（前年同月比32.3%増）、ホエイ（同22.4%増）、WPC（タンパク質濃縮ホエイ、同49.3%増）、バター（同49.2%増）が大幅に増加し、乳製品全体としては好調に推移している（表）。

品目別に見ると、脱脂粉乳は、引き続き中国や東南アジアからの需要減退などによりかなりの程度減少（同7.1%減）し、前年同月比では10カ月連続で減少が続いている。一方、大幅に増加したホエイ、WPCについて、米国乳製品輸出協会（USDEC）によると、最大の輸出先である中国国内で豚肉の取引価格が高騰する中、養豚農家の生産意欲の高まりを受け、豚への飼料用需要が増加したことなどが要因と分析している。また、バターは米国内での価格が上昇し、同国産バターの国際的な価格の優位性が低下する中で、メキシコ、カナダ向けが両国内での需要増から前年同月比で倍増するなど、好調を維持している。

表 乳製品輸出量の推移

(単位：千トン)

品目	2021年 9月	22年 9月	前年同月比 (増減率)	22年 (1～9月)	
				前年同月比 (増減率)	前年同期比 (増減率)
脱脂粉乳	69.7	64.8	▲7.1%	620.4	▲9.3%
乳糖	31.4	41.5	32.3%	341.5	17.6%
チーズ	34.0	35.7	5.1%	341.1	12.5%
ホエイ	18.4	22.5	22.4%	163.3	▲5.7%
WPC	10.2	15.2	49.3%	129.3	21.4%
バター	3.2	4.8	49.2%	46.4	41.0%

資料：USDA [Dairy Data]

注：製品重量ベース。

(調査情報部 伊藤 瑞基)

E U

主要生産国の生乳出荷量、前年同月を上回る

22年9月の生乳出荷量、前年同月比
0.9%増

欧州委員会によると、2022年9月の生乳出荷量（EU27カ国）は、1151万1950トン（前年同月比0.9%増）と2カ月ぶりに前年同月を上回った（表1）。

同月の生乳出荷量を国別に見ると、主要国

ではドイツ（同1.2%増）、フランス（同0.4%増）、オランダ（同3.9%増）、ポーランド（同2.6%増）、アイルランド（同1.1%増）が増加した一方で、イタリア（同0.1%増）は前年同月並みとなった。

USDAによると、21年下期はドイツやフランスなど複数の国で生乳出荷量は低迷したものの、今期は気温が穏やかであるため生乳出

表1 主要生産国別生乳出荷量の推移

(単位：千トン)

	2021年 9月	2022年 9月	前年同月比 (増減率)	2022年 (1～9月)	
				前年同月比 (増減率)	前年同期比 (増減率)
ドイツ	2,519	2,551	1.2%	24,132	▲0.9%
フランス	1,823	1,831	0.4%	18,186	▲1.2%
オランダ	1,065	1,106	3.9%	10,340	0.0%
ポーランド	997	1,023	2.6%	9,708	2.1%
イタリア	1,014	1,016	0.1%	9,726	▲1.7%
アイルランド	800	809	1.1%	7,583	▲0.3%
スペイン	593	572	▲3.6%	5,547	▲1.9%
デンマーク	459	456	▲0.6%	4,266	▲0.1%
ベルギー	341	361	5.9%	3,399	2.0%
その他	1,801	1,788	▲0.7%	17,076	▲0.6%
合計	11,412	11,512	0.9%	109,963	▲0.5%

資料：欧州委員会 [Eurostat]

注1：速報値。

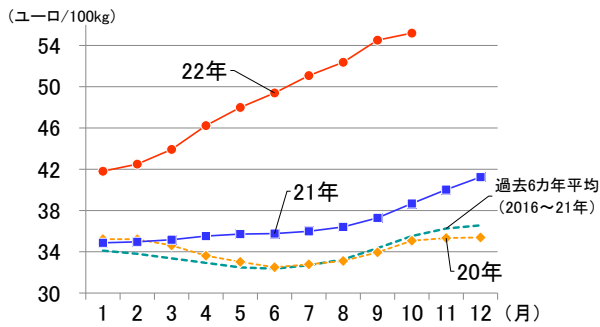
注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

荷量は前年同期の水準を上回っているとして
いる。また、生乳取引価格が堅調なことも、
生乳出荷量の増産に寄与しているとしている。

生乳取引価格は最高値を更新

欧州委員会によると、2022年10月の生
乳取引価格（EU27カ国の平均）は、100キ
ログラム当たり55.20ユーロ（8008円：1
ユーロ=145.08円^{（注1）}、前年同月比42.7%
（高）と20カ月連続で前年同月を上回って
おり、かつ、最高値を更新している（図）。

図 生乳取引価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」
注1：直近月は推定値。
注2：データが未公表のルクセンブルグは除く。

一方で、バターをはじめとした主要乳製品
の価格は、輸出量の減少などのため下落傾向
にある。業界関係者によると、乳製品需要の
減少が継続すると、今後の乳価も下落する可
能性があるとしている。

（注1）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・
月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

第1～3四半期の乳製品の輸出量、 前年同期比減

欧州委員会によると、2022年第1～3四
半期（1～9月）の英国を除くEU域外向け
の乳製品輸出量は、バターが前年同期比
6.6%減の13万1636トン、脱脂粉乳が同
15.4%減の51万7389トン、チーズが同
3.4%減の69万8522トン、全粉乳が同
19.7%減の17万9553トンといずれも前年
同期を下回った（表2）。

表2 主要乳製品のEU域外向け輸出量の推移

（単位：千トン）

バター				脱脂粉乳				チーズ				全粉乳			
輸出先	2021年 (1～9月)	22年 (1～9月)	前年同期比 (増減率)	輸出先	21年 (1～9月)	22年 (1～9月)	前年同期比 (増減率)	輸出先	21年 (1～9月)	22年 (1～9月)	前年同期比 (増減率)	輸出先	2021年 (1～9月)	2022年 (1～9月)	前年同期比 (増減率)
米国	32	32	▲2.2%	アルジェリア	78	78	▲0.0%	米国	99	97	▲2.1%	オマーン	36	42	18.1%
中国	14	10	▲32.7%	中国	108	64	▲40.9%	日本	93	95	2.3%	中国	18	16	▲8.6%
韓国	8	8	3.5%	インドネシア	52	38	▲27.2%	スイス	56	54	▲3.7%	クウェート	5	10	93.5%
サウジアラビア	7	8	6.4%	エジプト	29	31	7.5%	韓国	37	41	11.1%	トリニダード・トバゴ	2	8	216.4%
スイス	3	6	101.9%	フィリピン	37	27	▲25.8%	サウジアラビア	32	35	6.4%	アルジェリア	13	7	▲49.6%
アラブ首長国連邦	3	5	39.8%	ナイジェリア	35	27	▲22.2%	ウクライナ	38	26	▲31.7%	ドミニカ共和国	5	6	24.0%
インドネシア	3	5	50.2%	マレーシア	31	22	▲30.3%	中国	31	23	▲24.5%	セネガル	8	5	▲33.9%
その他	98	87	▲10.9%	その他	474	387	▲18.4%	その他	556	536	▲3.5%	その他	178	125	▲30.0%
合計	141	132	▲6.6%	合計	612	517	▲15.4%	合計	723	699	▲3.4%	合計	224	180	▲19.7%

資料：「Global Trade Atlas」
注1：HSコードは、脱脂粉乳が0402.10、チーズが0406、全粉乳が0402.21と0402.29、バターが0405.10。
注2：英国を除く。

EUの乳製品輸出をけん引してきた中国向けは、同国の生乳生産量増加やCOVID-19に起因する需要低下などから輸出量が減少している^(注2)。また、乳製品価格は下降基調にあるものの、オセアニアや米国などの輸出競合

国を上回る水準であることなどが、輸出量の減少につながっている。

(注2)『畜産の情報』2022年9月号「主要乳製品輸入量、全品目で減少」(https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002374.html)を参照されたい。

(調査情報部 渡辺 淳一)

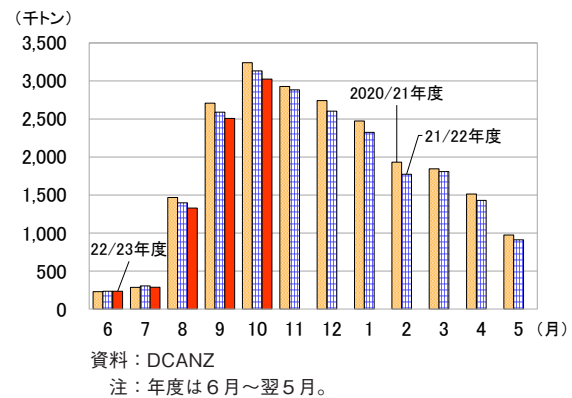
N Z

生乳生産量、引き続き前年割れで推移

22年10月の生乳生産量、4カ月連続で前年同月を下回る

ニュージーランド乳業協会(DCANZ)によると、2022年10月の生乳生産量は302万4800トン(前年同月比3.5%減)と4カ月連続で前年同月を下回った(図1)。この結果、22/23年度(6月~翌5月)の10月までの累計でも、738万3700トン(前年同期比6.9%減)とかなりの程度減少した。この要因について同国乳業最大手のフォンテラ社は、10月前半に北島で冷涼多雨が続いたことで日照不足となり、牧草の生育状態が不良となったことを挙げている。ニュージーランド証券取引所(NZX)によると、同国では6月のシーズン当初から多雨と低温が続き、一部地域では洪水が発生するなどして生乳生産が低迷していたものの、10月後半に入り、天候が回復し、牧草の生育状態も回復傾向にあるとしている。

図1 生乳生産量の推移



乳製品輸出量、バターおよびバターオイルが前年同月を大幅に上回る

ニュージーランド統計局(Stats NZ)によると、2022年10月の乳製品輸出量は、脱脂粉乳とバターおよびバターオイルが前年同月を上回った(表、図2)。品目別に見ると、脱脂粉乳は、最大の輸出先の中国向けが前年同月比で4割程度減少したものの、主要輸出先であるインドネシアでは、口蹄疫への対応

表 乳製品輸出品量の推移

(単位：トン)

品目	2021年 10月	22年 10月	前年同月比 (増減率)	22/23年度	前年同期比 (増減率)
				(7～10月)	
脱脂粉乳	30,678	33,977	10.8%	93,389	12.3%
全粉乳	124,859	121,397	▲ 2.8%	395,854	15.2%
バターおよびバターオイル	30,155	41,436	37.4%	141,833	51.4%
チーズ	31,591	25,803	▲ 18.3%	105,060	6.5%

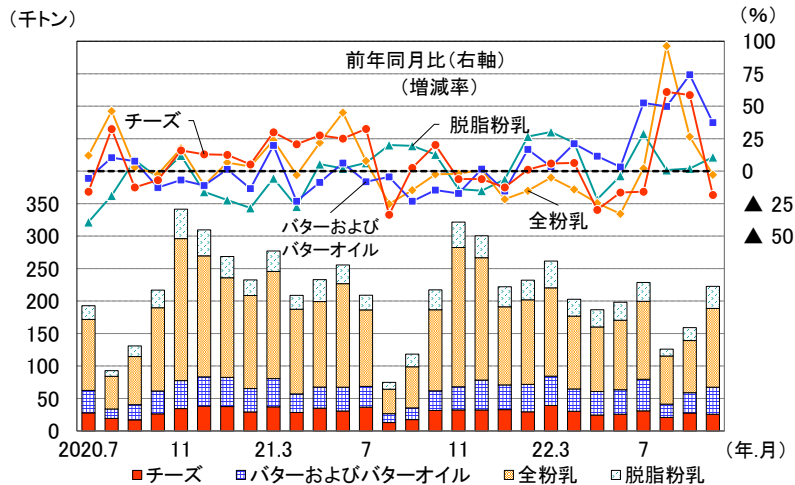
資料：Stats NZ

注1：HSコードは、脱脂粉乳が0402.10、全粉乳が0402.21と0402.29、バターおよびバターオイルが0405.10と0405.90、チーズが0406。

注2：製品重量ベース。

注3：年度は7月～翌6月。

図2 乳製品輸出品量および前年同月比（増減率）の推移



資料：Stats NZ

注：製品重量ベース。

が進む中^(注1)、同国向けが同4倍程度増加したことで全体でもかなりの程度増加した。全粉乳は、最大の輸出先の中国向けが前年の半数程度まで減少したものの、インドネシアや豪州向けが大幅に増加したことで相殺され、全体ではわずかな減少にとどまった。バターおよびバターオイルは、中国向けが同2倍程度増加したことで全体でも大幅に増加した。一方、チーズは、最大の輸出先である中国向けをはじめ、主要輸出先の日本、豪州、韓国向けがそれぞれ減少したことで、全体でも大幅に減少した。

(注1) 海外情報「口蹄疫対策として300万回分のワクチン接種などを実施（インドネシア）」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003361.html)を参照されたい。

GDT価格、脱脂粉乳および全粉乳が前回開催を上回る

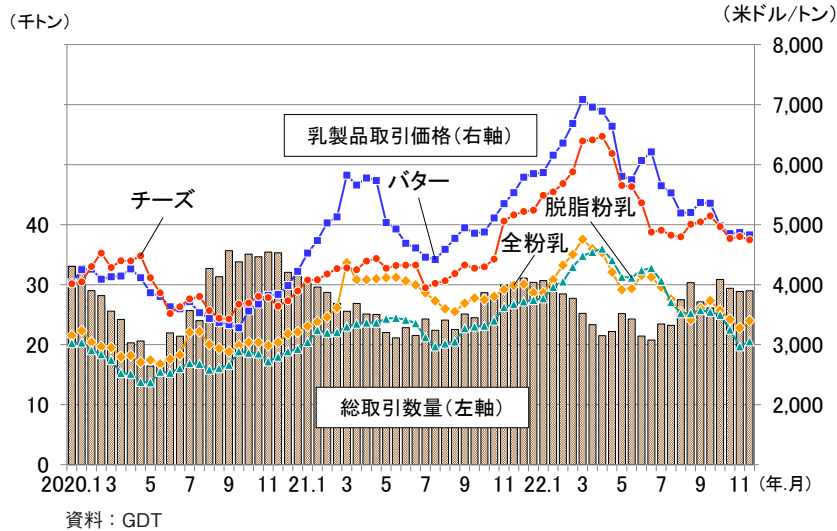
2022年11月15日に開催されたGDT^(注2)の1トン当たりの平均取引価格は、脱脂粉乳および全粉乳が前回開催（11月1日）を上回る結果となった（図3）。両品目のGDT価格は、ウクライナ情勢の悪化やCOVID-19の影響を受けた中国での乳製品需要が低迷していることから、下落傾向で推移していたものの、中東やEUからの引き合いが強まったことで反騰した。今後の予測について現地報道によると、世界的な天候不良で牧草が生育不良となり、乳製品の供給が減少すると見込ま

れているため、主要4品目の価格は下げ止まるとしている。また、中国でCOVID-19の規制が緩和されれば需要は徐々に戻るとし、今後、乳製品価格は反転に向かうとの見解

が示されている。

(注2) グローバルデイリートレード。月2回開催される電子オークションで、当該価格は乳製品の国際価格の指標とされている。

図3 GDTの乳製品取引価格と総取引数量の推移



(調査情報部 工藤 理帆)

中国

生乳生産量の増加傾向、乳製品輸入量の減少傾向、ともに続く

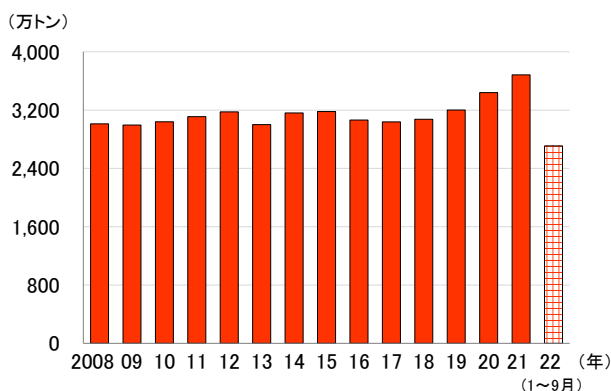
生乳生産量は引き続き増加

中国国家统计局によると、2022年1～9月期の生乳生産量は、前年同期比7.7%増の2709万トンとなった(図1)。

中国農業農村部は、本年4月に公表した「中

国農業展望報告(2022-31)」(注1)の中で、22年の生乳等生産量(注2)を3979万トン(前年比5.4%増)と予測していたが、(1)生乳のみで9月時点の生産量が2709万トンに達していること(2)同国の生乳生産量は通例10～12月期にピークを迎えること一を考慮すると、22年の生乳等生産量は4月時点の予測を超える可能性が高まってきたとみられる(注3)。

図1 生乳生産量の推移



(注1) 海外情報「中国農業展望報告(2022-2031)を公表(乳製品編)(中国)」(https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003277.html)を参照されたい。

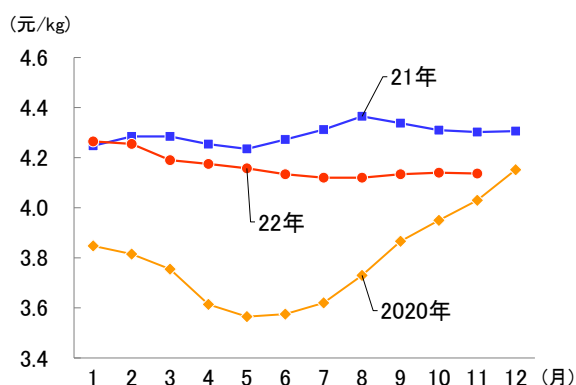
(注2) 牛由来の生乳のほか、ヤギやヤクなどの他品種由来の乳を含む生産量。

(注3) 第3四半期(7～9月)と第4四半期(10～12月)の生乳生産量の比率(過去3年平均)から、本年第4四半期の生乳生産量を試算すると1284万トンとなり、通年で3993万トンとなる。したがって、これに他畜種由来の乳を加えた生乳等生産量は、予測量の3979万トンを超える可能性は高いと見込まれる。

生乳価格は引き続き高値推移も生産コスト増

生乳価格は、2021年8月以降緩やかな下落傾向にあったが、22年7月最終週の1キログラム当たり4.11元（81円：1元＝19.73円^{（注4）}）を底にわずかに持ち直した（図2）。その後は横ばいで推移し、同年11月には同4.14元（82円）となった。今後の価格動向について現地関係者の間では、乳製品の需要期である冬場を迎えることから、今後大幅な下落はないとの見方が大勢を占めている。

図2 生乳価格の推移



資料：中国農業農村部

注：主要10省・自治区（全国の生乳生産量の8割以上を占める）の農家庭先価格の平均。

一方、現地専門家からは、飼料など生産コストの増加分を賄うには現在の価格水準でも十分とは言えず、中小牧場では牛を手放すような状況も見られるとの意見も聞かれた。

（注4）三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

乳製品輸入量は多くの品目で大幅減

2022年1～10月の主要乳製品輸入量は、バターおよび育児用調製粉乳を除く6品目で減少した（表）。

昨今の輸入量減少について現地専門家からは、前年同期の輸入実績が大きかったこと、また、乳製品国際価格の高騰やCOVID-19に起因する需要低下など複数の要因が挙げられている。特に、中国の乳製品輸入の中で大きなウエイトを占める粉乳類（全粉乳および脱脂粉乳）の動向については、（1）国際相場の高騰から輸入意欲が低下していること（2）COVID-19に起因する需要低下で国内の生乳が過剰気味であるため、粉乳に仕向けられる生乳が増加し、輸入の必要性が薄れていること一が挙げられた。

表 主な乳製品の品目別輸入数量の推移

（単位：万トン）

	2018年	19年	20年	21年	22年 (1～10月)	前年同期比 (増減率)	【参考：輸入額】 前年同期比 (増減率)
全粉乳	52.1	67.1	64.4	84.9	62.8	▲16.6%	▲0.3%
脱脂粉乳	28.0	34.4	33.6	42.6	28.1	▲25.0%	▲2.2%
飲用乳	54.4	72.9	84.5	99.6	60.9	▲26.5%	▲19.7%
ヨーグルト	2.7	3.2	2.8	2.5	1.8	—	—
チーズ	10.8	11.5	12.9	17.6	12.4	▲15.6%	▲1.0%
バター	8.7	6.2	8.6	9.7	8.6	0.6%	34.5%
育児用調製粉乳	33.3	35.6	34.8	27.3	23.0	6.0%	9.2%
ホエイ	55.5	45.1	62.3	71.8	48.5	▲23.0%	▲9.1%

資料：「Global Trade Atlas」

注：HSコードは、全粉乳が0402.21と0402.29、脱脂粉乳が0402.10、飲用乳が0401.10と0401.20、ヨーグルトは0403.10（2021年まで）と0403.20（22年）、チーズが0406、バターが0405.10、育児用調整粉乳が1901.10、ホエイが0404.10。なお、ヨーグルトは、22年1月1日のHS品目表の改訂により、市場実態に合わせてヨーグルトの範囲が拡大されたため、22年とそれ以前のデータに連続性はない。

（調査情報部 阿南 小有里）

飼料穀物

世界

生産量と消費量の乖離^{かいり}が拡大し、期末在庫は前年度比微減の見込み

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年11月9日、22/23年度の世界のトウモロコシ需給予測値を更新した（表）。

これによると、世界のトウモロコシ生産量は11億6839万トン（前年度比4.0%減）と前月から35万トン下方修正され、前年度をやや下回ると見込まれている。地域別に見ると、米国やトルコなどで前月から生産量が増加したものの、ハンガリーでの減産が見込まれるEUの生産量が下方修正されたことで、これが吸収される形となった。特に、猛暑と乾燥により作柄の見通しが悪いEUは5480万トン（同22.8%減）と、今年度と同等の干ばつ被害があった07/08年度以来の不作が見込まれている。

輸入量は、世界全体で1億7760万トン（同3.4%減）と前月から136万トン下方修正され、前年度からやや減少すると予測されている。地域別に見ると、増産が見込まれるトル

コで30万トン下方修正された他、アルジェリアで30万トン、ベトナムで50万トン下方修正された。

消費量は、世界全体で11億7530万トン（同2.3%減）と前月から75万トン上方修正されたものの、前年度からわずかな減少が見込まれている。地域別に見ると、米国での飼料など向けの増加などにより前月から上方修正されたものの、EUなどで下方修正されたことが影響した。なお、最大の消費国である中国は2億9500万トンと前月から据え置かれた。

輸出量は、世界全体で1億8274万トン（同9.5%減）と前月から30万トン下方修正され、前年度からかなりの程度減少が見込まれている。地域別に見ると、南アフリカが減産を受けて30万トン下方修正された。

この結果、期末在庫は3億76万トン（同2.2%減）と前月から43万トン下方修正され、前年度からわずかな減少が見込まれている。

表 主要国のトウモロコシの需給見通し（2022年11月9日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区 分	2020/21年度	21/22年度		22/23年度		
		(推計値)	(10月予測)	(11月予測)	前年度比 (増減量)	前年度比 (増減率)
米国						
期首在庫	48.76	31.36	34.98	34.98	3.6	11.5%
生産量	358.45	382.89	352.95	353.84	▲ 29.1	▲ 7.6%
輸入量	0.62	0.62	1.27	1.27	0.7	2.0倍
消費量	306.69	317.12	304.81	305.45	▲ 11.7	▲ 3.7%
輸出量	69.78	62.78	54.61	54.61	▲ 8.2	▲ 13.0%
期末在庫	31.36	34.98	29.77	30.02	▲ 5.0	▲ 14.2%
アルゼンチン						
期首在庫	3.62	1.18	1.49	1.49	0.3	26.3%
生産量	52.00	51.50	55.00	55.00	3.5	6.8%
輸入量	0.01	0.01	0.01	0.01	0.0	0.0%
消費量	13.50	14.70	14.00	14.00	▲ 0.7	▲ 4.8%
輸出量	40.94	36.50	41.00	41.00	4.5	12.3%
期末在庫	1.18	1.49	1.49	1.49	0.0	0.0%
ブラジル						
期首在庫	5.33	4.15	4.95	4.95	0.8	19.3%
生産量	87.00	116.00	126.00	126.00	10.0	8.6%
輸入量	2.85	2.30	1.30	1.30	▲ 1.0	▲ 43.5%
消費量	70.00	73.00	77.00	77.00	4.0	5.5%
輸出量	21.02	44.50	47.00	47.00	2.5	5.6%
期末在庫	4.15	4.95	8.25	8.25	3.3	66.7%
ウクライナ						
期首在庫	1.48	0.83	4.57	4.57	3.7	5.5倍
生産量	30.30	42.13	31.50	31.50	▲ 10.6	▲ 25.2%
輸入量	0.02	0.02	0.00	0.00	0.0	-
消費量	7.10	11.40	10.70	10.70	▲ 0.7	▲ 6.1%
輸出量	23.86	27.00	15.50	15.50	▲ 11.5	▲ 42.6%
期末在庫	0.83	4.57	9.87	9.87	5.3	2.2倍
EU						
期首在庫	7.38	7.88	9.96	9.96	2.1	26.4%
生産量	67.44	70.98	56.20	54.80	▲ 16.2	▲ 22.8%
輸入量	14.49	20.00	20.00	20.00	0.0	0.0%
消費量	77.70	82.90	76.10	74.70	▲ 8.2	▲ 9.9%
輸出量	3.74	6.00	2.70	2.70	▲ 3.3	▲ 55.0%
期末在庫	7.88	9.96	7.36	7.36	▲ 2.6	▲ 26.1%
中国						
期首在庫	200.53	205.70	209.24	209.14	3.4	1.7%
生産量	260.67	272.55	274.00	274.00	1.4	0.5%
輸入量	29.51	21.88	18.00	18.00	▲ 3.9	▲ 17.7%
消費量	285.00	291.00	295.00	295.00	4.0	1.4%
輸出量	0.00	0.00	0.02	0.02	0.0	-
期末在庫	205.70	209.14	206.22	206.12	▲ 3.0	▲ 1.4%
世界計						
期首在庫	307.48	292.80	307.01	307.68	14.9	5.1%
生産量	1,129.29	1,217.46	1,168.74	1,168.39	▲ 49.1	▲ 4.0%
輸入量	184.94	183.92	178.96	177.60	▲ 6.3	▲ 3.4%
消費量	1,143.97	1,202.59	1,174.55	1,175.30	▲ 27.3	▲ 2.3%
輸出量	182.60	201.83	183.04	182.74	▲ 19.1	▲ 9.5%
期末在庫	292.80	307.68	301.19	300.76	▲ 6.9	▲ 2.2%

資料：USDA/WAOB [World Agricultural Supply and Demand Estimates]

注：各国の穀物年度 世界、米国：9月～翌8月/ウクライナ、EU、中国：10月～翌9月/アルゼンチン、ブラジル：3月～翌2月。

（調査情報部 針ヶ谷 敦子）

米国の生産量は上方修正、 世界期末在庫は引き続き1億トンを維持

USDA/WAOBおよびUSDA/FASは2022年11月9日、22/23年度の世界の大豆需給予測値を更新した(表)。

これによると、世界の生産量は3億9053

万トン(前年度比9.8%増)と前月から46万トン下方修正された。このうち、最大の生産国であるブラジルは、前月(300万トン上方修正)から据え置かれた。これに続く米国

表 主要国の大豆需給見通し(2022年11月9日米国農務省公表)

(単位:百万トン)

区 分	2020/21年度	21/22年度		22/23年度	
		(推計値)	(10月予測)	(11月予測)	前年度比 (増減率)
米国					
期首在庫	14.28	6.99	7.45	7.45	6.6%
生産量	114.75	121.53	117.38	118.27	▲ 2.7%
輸入量	0.54	0.43	0.41	0.41	▲ 4.7%
消費量	58.26	59.98	60.83	61.10	1.9%
輸出量	61.67	58.72	55.66	55.66	▲ 5.2%
期末在庫	6.99	7.45	5.44	5.99	▲ 19.6%
ブラジル					
期首在庫	20.42	29.40	23.16	23.34	▲ 20.6%
生産量	139.50	127.00	152.00	152.00	19.7%
輸入量	1.02	0.54	0.75	0.75	38.9%
消費量	46.68	51.00	51.50	51.75	1.5%
輸出量	81.65	79.36	89.50	89.50	12.8%
期末在庫	29.40	23.34	31.31	31.24	33.8%
アルゼンチン					
期首在庫	26.65	25.06	23.15	23.90	▲ 4.6%
生産量	46.20	43.90	51.00	49.50	12.8%
輸入量	4.82	3.84	4.80	4.80	25.0%
消費量	40.16	38.83	40.50	39.75	2.4%
輸出量	5.20	2.86	7.00	7.20	151.7%
期末在庫	25.06	23.90	24.20	24.00	0.4%
中国					
期首在庫	24.61	31.15	30.74	31.79	2.1%
生産量	19.60	16.40	18.40	18.40	12.2%
輸入量	99.74	91.57	98.00	98.00	7.0%
消費量	93.00	87.50	96.00	96.00	9.7%
輸出量	0.07	0.10	0.10	0.10	0.0%
期末在庫	31.15	31.79	30.46	31.50	▲ 0.9%
世界計					
期首在庫	94.74	100.03	92.38	94.67	▲ 5.4%
生産量	368.52	355.59	390.99	390.53	9.8%
輸入量	165.54	156.24	166.23	166.28	6.4%
消費量	315.43	314.51	329.44	329.28	4.7%
輸出量	165.00	154.02	168.84	169.14	9.8%
期末在庫	100.03	94.67	100.52	102.17	7.9%

資料: USDA/WAOB [World Agricultural Supply and Demand Estimates]

注1: 各国の穀物年度 米国: 9月~翌8月/ブラジル、アルゼンチン、中国: 10月~翌9月。

注2: 消費量は搾油仕向量である。

は、単収がわずかに上向くことで89万トン上方修正されたが、前月の下方修正分（178万トン）を埋めるには至らなかった。このほか、アルゼンチンは干ばつ傾向にあることで前月から150万トン下方修正され、中国は前月から据え置かれた。

輸入量は、世界全体で1億6628万トン（同6.4%増）と前月から5万トン上方修正された。このうち、最大の輸入国である中国は、前月（100万トン上方修正）から据え置かれた。

消費量（搾油仕向け）は、世界全体で3億2928万トン（同4.7%増）と前月から16万トン下方修正された。このうち、最大の消費国である中国は、前月（100万トン上方修正）から据え置かれた。

輸出量は、世界全体で1億6914万トン（同9.8%増）と前月から30万トン上方修正された。このうち、最大の輸出国であるブラジル、これに続く米国はいずれも前月から据え置かれた。

この結果、期末在庫は1億217万トン（同7.9%増）と前月から165万トン上方修正された。

今回の予測について米国の穀物関係者からは、11月予測は例年、大きな動きが見られないとされる中で、特に今回は目新しいものがなかったとの声が出ている。一方で、大豆生産者からは、消費量が伸び悩む中での生産量の増加は、今後、高水準にある大豆価格の下落につながるとの懸念も示されている。

（調査情報部 横田 徹）

米 国

米国生産量は4カ月ぶりに上方修正されるも期末在庫率は引き続き低水準

USDA/WAOBは2022年11月9日、22/23年度（9月～翌8月）の米国のトウモロコシ需給見通しを更新した（表）。

生産量は、単収増加予測を受けて139億3000万ブッシェル（3億5384万トン^{（注1）}、前年度比7.6%減）と前月から3500万ブッシェル（89万トン）上方修正されたものの、前年度からかなりの程度減少すると見込まれている。

消費量は、120億2500万ブッシェル（3億545万トン、同3.7%減）と前月から2500万ブッシェル（64万トン）上方修正されたものの、前年度からやや減少すると見込まれている。内訳を見ると、飼料など向けが2500万ブッシェル（64万トン）上方修正され、エタノール向けは前月から据え置か

れた。

輸出量は、21億5000万ブッシェル（5461万トン、同13.0%減）と前月から据え置かれ、前年度からかなり大きく減少すると見込まれている。

この結果、期末在庫は、増産を背景に前月から1000万ブッシェル（25万トン）上方修正されたものの、11億8200万ブッシェル（3001万トン、同14.2%減）と、引き続き前年度をかなり大きく下回ると見込まれている。

また期末在庫率（総消費量に対する期末在庫量）は8.3%（同0.9ポイント減）と、前月と変わらず8%台前半にまで低下すると予測されている。

生産者平均販売価格は、1ブッシェル当た

り6.80米ドル（951円。1キログラム当たり37.4円:1米ドル=139.87円^(注2)）と前月から据え置かれ、前年度からかなり大きく上昇し、12/13年度に記録した同6.89米ドル(964円)

以来の高値水準となることが予測されている。

(注1) 1ブッシェルを約25.401キログラムとして農畜産業振興機構が換算。

(注2) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

表 米国のトウモロコシの需給見通し（2022年11月9日米国農務省公表）

区 分	－単位－	2020/21年度	21/22年度 (推計値)	22/23年度			
				(10月予測)	(11月予測)	参考（換算値）	前年度比 (増減率)
作付面積	(百万エーカー)	90.7	93.3	88.6	88.6	35.9 (百万ヘクタール)	▲5.0%
収穫面積	(百万エーカー)	82.3	85.3	80.8	80.8	32.7 (百万ヘクタール)	▲5.3%
単収	(ブッシェル/エーカー)	171.4	176.7	171.9	172.3	10.8 (トン/ヘクタール)	▲2.5%
生産量	(百万ブッシェル)	14,111	15,074	13,895	13,930	353.84 (百万トン)	▲7.6%
輸入量	(百万ブッシェル)	24	24	50	50	1.27 (百万トン)	2.1倍
期首在庫	(百万ブッシェル)	1,919	1,235	1,377	1,377	34.97 (百万トン)	11.5%
総供給量	(百万ブッシェル)	16,055	16,333	15,322	15,357	390.08 (百万トン)	▲6.0%
国内消費量	(百万ブッシェル)	12,074	12,484	12,000	12,025	305.45 (百万トン)	▲3.7%
飼料など向け	(百万ブッシェル)	5,607	5,717	5,275	5,300	134.63 (百万トン)	▲7.3%
食品・種子・その他工業向け	(百万ブッシェル)	6,467	6,767	6,725	6,725	170.82 (百万トン)	▲0.6%
うちエタノール向け	(百万ブッシェル)	5,028	5,326	5,275	5,275	133.99 (百万トン)	▲1.0%
輸出量	(百万ブッシェル)	2,747	2,471	2,150	2,150	54.61 (百万トン)	▲13.0%
総消費量	(百万ブッシェル)	14,821	14,956	14,150	14,175	360.06 (百万トン)	▲5.2%
期末在庫	(百万ブッシェル)	1,235	1,377	1,172	1,182	30.01 (百万トン)	▲14.2%
期末在庫率	(%)	8.3	9.2	8.3	8.3		0.9ポイント減
生産者平均販売価格	(米ドル/ブッシェル)	4.53	6.00	6.80	6.80	37.4 (円/kg)	13.3%

資料：USDA/WAOB [World Agricultural Supply and Demand Estimates]

注1：年度は各年9月～翌8月。

注2：1エーカーは約0.4047ヘクタール。

(調査情報部 針ヶ谷 敦子)

中国

トウモロコシおよび大豆の価格動向

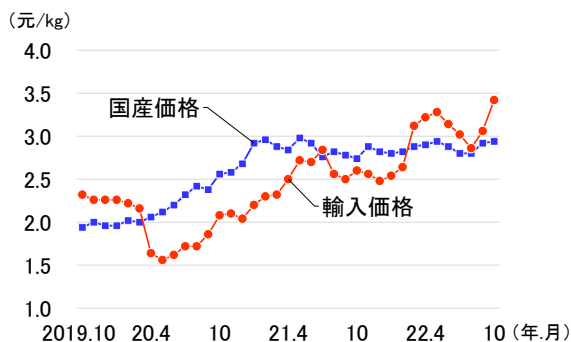
国産トウモロコシ価格、川下需要の改善から安定的に推移と予想

中国農業農村部は11月23日、「農産物需給動向分析月報（2022年10月）」を公表した。この中で、2022年10月の国産トウモロコシ価格は前月からわずかに上昇した（図1）。同月の国内のトウモロコシ需給を見ると、収穫が進み国内市場への供給量が増えている中で、従来の飼料需要に加えて加工業界からの需要も上向いていることから、ややタ

イトな状況にあるとされている。現地報道によると、今期は生産コストの上昇などから生産者はさらなる価格上昇を視野に放出を控える動きもあり、主産地東北部の収穫量に対する販売数量（11月15日時点）の割合は前年同期比3ポイント減の12%とされている。このため国産価格は、短期的には現行水準以上で推移すると見込まれている。

各地の価格動向を見ると、主要養豚生産地である中国南部向け飼料原料集積地となる広東省黄埔港到着の輸入トウモロコシ価格（関

図1 トウモロコシ価格の推移



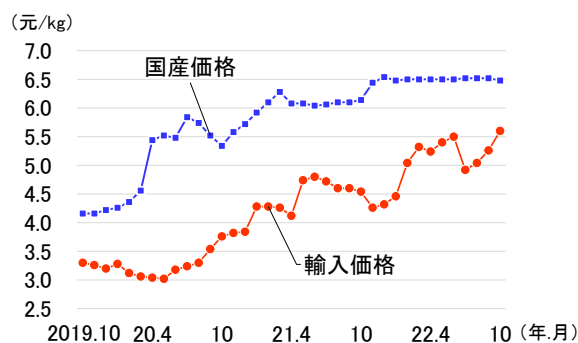
資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成
 注1：国産価格は、中国東北部から広東省黄埔港までの運賃込み2級黄トウモロコシ価格。
 注2：輸入価格は、米国メキシコ湾積出し2級黄トウモロコシの広東省黄埔港引渡し価格（関税割当数量内：課税後）。

税割当数量内:1%の関税+25%の追加関税)は、22年10月が1キログラム当たり3.42元(67円:1元=19.73円^(注))となった。同年3月以降、国産価格を上回って推移していた同価格は、5月をピークに下落し、国産と輸入の価格差は狭まったが、米国でのトウモロコシ減産予測などもある中で一転して反発している。このため、同月の国産トウモロコシ価格(東北部産の同港到着価格)同2.94元(58円)に比べて同0.48元(9円)高となり、国産と輸入との価格差は再び開いている。

国産大豆価格、需給の緩みも若干の下落と予想

2022年10月の国産大豆価格は、前月からわずかに下落した(図2)。同月の国内の大豆需給を見ると、今期の大豆生産は増加が見込まれる中で、食用需要は弱いものの搾油用は一定の需要があることで、弱含みながらも安定状況にある。今期の大豆生産は、中央政府による増産の呼びかけから作付面積が拡大しているが、現地報道によると、主産地を含め各地で増産が報じられる中で、今年は例年の旧正月前の需要増も見られず、全体的に需給は緩んでいるとされている。ただし、非

図2 大豆価格の推移



資料：中国農業農村部のデータを基にALIC作成
 注1：国産価格は、山東省入荷価格。
 注2：輸入価格は、山東省青島港引渡し価格（課税後）。

遺伝子組み換え大豆である国産大豆は輸入大豆に比べて一定の需要があることで、生産量は増加しつつも価格は若干の下落にとどまると見込まれている。

各地の価格動向を見ると、主産地である黒竜江省の食用向け国産大豆平均取引価格は、10月が1キログラム当たり5.90元(116円、前年同月比1.3%高)と高い水準で推移している。また、大豆の国内指標価格の一つとなる山東省の国産大豆価格は、同6.48元(128円、同5.6%高)と同じく高い水準にある。国産大豆と輸入大豆との価格差は、大豆国際相場の上昇などから縮小し、同0.88元(17円)となった。

このような中で、大豆の輸入量は引き続き高い水準で推移しているが、記録的な輸入量となった前年からは減少している。22年(1~9月)の輸入量は6905万トン(前年同期比6.7%減)、輸入額は世界的な穀物相場高の影響から同15.9%増の464億7700万米ドル(6兆5007億円:1米ドル=139.87円^(注))と報告されている。

(注) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年11月末TTS相場。

(調査情報部 横田 徹)